

郷土館だより

Vol. I No.3

1979. 4. 1



(安養院一政子像)
崇徳院 頼朝像

目 次

| | |
|----------------------|---|
| 多呂地区の歴史・民俗調査(3)..... | 1 |
| 郷土史の散歩道(3)..... | 3 |
| 新収蔵品の紹介・特別展報告..... | 5 |
| 講座「初午幟作り」報告..... | 6 |
| おしらせ・その他..... | 7 |

郷土館フィールドワークから
多呂地区の歴史・民俗調査(3)
 館員(学芸員) 杉村 斉

ムラの信仰 (1)

現代に生きる私達にとっては、信仰生活と日常生活とはすぐ結びつかないように思える。ところが現代でも、少しでもムラ(農・山・漁村)の中に入ってみれば、ムラの生活が信仰と無縁ではないことに気付くであろう。どこのムラへ行っても、どんな小さいムラでも必ずと言って良いほど神社があり、寺があり、路傍には数々の神仏石像等を見つけることができる。農耕や狩猟に生活の糧を求めた私達の祖先にとって、生産の豊饒など生活の安定に対する切望は、現代人の想像も及ばないほどに大きいものであったにちがいない。

ムラの信仰は、民間信仰という言葉に代表される。民間信仰は、仏教やキリスト教のような成立宗教と異なり、教義を持たず、ムラとかマチといった地域社会において日常生活と密接して信仰されている。したがって一見同様な信仰と思えるものでも、隣ムラとは信仰形態が違うというような現象も見られる。きわめて地方色豊かな土臭さの匂うものである。

以下、前回に続いて多呂地区におけるムラの信仰について報告したい。

氏神様 一神明神社一

多呂の氏神様は、旧部落が密集している小さい谷の最奥の高台に部落を見渡すように鎮座している。寛文9年(1619)に部落全体が現在地に移住する以前は、今はビニールハウスが設けられているヤシキダ(屋敷田)という所に祀られていたという。多呂の人々の間ではこの地を今でもオシメイサンのクボと呼んでいる。

氏神信仰はムラの信仰生活の根幹をなすものと言える。村人はすべて氏子としてその祭りに奉仕する。古代においては、氏神は一族の守護神としての祖神という意味であったのが、現在では、多呂のように集落全体の村氏様として、同義に解されている場合が多い。

神明神社の祠堂には神明様のほか八幡様、金毘羅様、山の神様、サイの神様が並祀されている。この氏神様の森はまさにムラの聖地であり、そこに生活する人々の精神の拠り所と言える。

祭日は神明様が7月15日、八幡様が8月14日で

ある。



氏神様の森
山の神様

ムラに山林を所有する部落では、山の神を祀っていることが多い。山仕事をするものの守護神として、現在でも市内佐野地区(やっさモチ)や玉沢では重要な年中行事の一つとして、ムラ祭りを行なっている。

多呂の山の神様は天保14年の村絵図によれば、北沢部落との境、部落の北側の山地に祀られていたようだ。現在は氏神様の祠堂にある。祭りは正月年頭の年中行事として初山入りを行なっていたと聞く。山の神様の弓矢を作り、モチと酒を神に供える儀式であった。ムラにおける山仕事の減少と共に初山入りの年中行事は行なわれなくなったようだ。

サイの神様

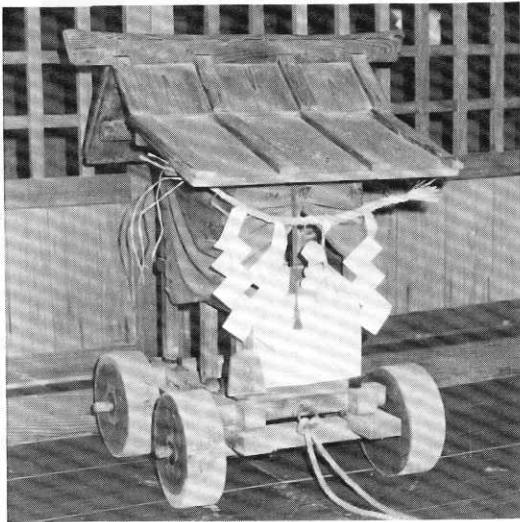
多呂でサイの神様と言われているものは、神明社に納められている曳車である。

サイの神信仰の分布は、静岡県民俗文化財地区によれば、富士川以東の県東部地域が圧倒的に密である。その呼び方にも道祖神、ドウロクジン、サイの神等、さまざまあるが、三島周辺では「セーノカミ」が普通であろう。サイの神様は部落に疫病などの侵入をふせぐ神「塞の神」とか幸福をもたらす神「幸の神」とか、きわめてバラエティに富んだ解釈がなされている。この地方の民間信仰の典型とも言えるものである。前三島市教育長の吉川静雄先生の著作集は、現在伊豆・駿東・富士山麓のサイの神研究には欠かせない重要文献となっている。

さて多呂の曳車であるが、これについては吉川先生の「私の中の道祖神」でも言及されているが、

北豆曳車分布圏とも言える特定地域の分布状況の中のサイの神信仰である。多呂のサイの神祭りは正月の子供行事であった。正月2日頃を皮切りに子供達に曳かれたサイの神様は部落中を回った。「サイの神さん、ゼニを取れ カミを取れ」と大声を出しながら、子供達は講の基金を集めた。曳車は、その後部落全戸で一晩づつ奉斎するのがならわしであった。各戸ではサイの神様が泊ると言って、ニワ(土間)に灯明をつけ御飯を供えてもてなしたそうである。子供達が集めた金は、曳車が最後の家を回った後に、オフルマイ用として食費等にあてられた。この会食が正月のサイの神祭りのフィナーレであった。

サイの神が子供の神様であるという信仰は、もっとも普遍的な解釈のように思える。



神明社祠堂内の曳車

路傍の神仏

ムラの路傍にひっそりと立つ神仏は、ムラの信仰をあるいは歴史を語りかけてくれるものである。道がコンクリートになり、周囲の景観は昔とは変わったけれども、信仰はそこに生きているように思える。

馬頭観音像

多呂部落の中央を東西に走る道路から数メートル北に入った小路の傍にある。浮彫石像の光背向って右側に、嘉永2西年3月吉日(1849)という建立の日付が読める。

馬は牛と共に家畜として古くから飼育されてきた。今のように機械力の悪い時代は、荷物の運搬に、農耕にと重要な動力源とされた。農家にとつ

て馬は収入源、財産であり、家族の一員のように大切に飼育され、死馬に対する供養も丁重に行なわれたのである。



馬頭観音像

唯念名号碑

唯念行者は駿東郡小山町奥の沢で修業し、ここを中心に周辺の村々に念仏をひろめた人である。県東部には唯念碑が多く見られる。

多呂の唯念碑は田種寺入口に在り、碑石には、
表 南無阿弥陀仏

裏 邑内安全 安政三丙辰年九月日(1856)

台石には

新井□兵衛、原長兵衛、甚兵衛、文左エ門、喜助、市右エ門、周蔵、文蔵、勘蔵、儀八
という崇敬者名が彫られている。



唯念名号碑

郷土史の散歩道(3)

頼朝の三島参り

館長 長谷川福太郎

源 頼朝が、天下の罪人として伊豆へ流されたのは、永暦元年(1160)3月のことである。それから、20年後の治承4年(1180)8月17日、「平家追討」「源氏再興」の兵を挙げ、またたく間に東国を平定して鎌倉入りをしている。

ところで、この20年間は、まさに平家全盛時代で、伊豆の者はもちろん、全国の誰れもが、後に頼朝が天下の「鎌倉殿」になることを予想した者はない。遠く奈良時代から続けられている、数多くの流罪人と同様に、将来をまったく期待出来ない人として、軽視していたものと考えられる。

このためか、伊豆流謫中の彼の行動には、信頼出来る記録が乏しい。しかし伊豆全地に残る頼朝伝承は、ずいぶん多い数に上っている。

さて、三島における頼朝の事跡と伝承は、現在筆者の承知しているものだけでも、次の様になっている。(この他にもあると思われる)

○三嶋大社(大社町)

百日祈願・旗上げ祈願を行なう。(頼朝の腰掛石・藤丸郎護衛趾・寄進状等)



頼朝の腰掛石(三嶋大社)

○間眠の松(東本町)

大社百日祈願満願の暁、この木の下でまどろんだという。

○妻塚(東本町)

大社百日祈願中、頼朝の身代りとなって夫に斬り殺された、大庭景親の妻の供養塚という。

○願成寺(川原ヶ谷)

頼朝はこの寺を宿所として、大社百日祈願を行なったという。

○崇徳院(松本)

頼朝の祈願寺であったという。(頼朝の木像)

○法華寺(東本町)

頼朝が写経を納めたという。(経塚・頼朝の衣かけ松・頼朝の腰掛石)



頼朝の衣掛松(法華寺)

○初音ヶ原

治承元年(1177)頼朝箱根権現参拝の帰途、ここで鶯の初音を聞いたという。

○御座松(現在は位置だけで、松はない)

江戸時代までは美事であったという。頼朝お手植の松か。

○坂の野生馬

頼朝がたびたび馬を選びに来たという。

○右内神社(梅名)

大社百日祈願の途中、この社に参拝した頼朝が、薙刀の石突で手洗水を湧き出させたという。

○周福寺(鶴喰)

頼朝が建てた寺という。

さて、伊豆配流中の頼朝の日課は、池の禪尼の固い戒めもあって、写経・読経を中心とした、一家一族供養のための仏事が大部分であったという。事実、平治の乱で父や兄を失い、弟たちは清盛の苛酷な処遇に泣き、一家離散して、まったく孤立化した彼にとっては、これ以外に生きる道はなかったであろう。

手のつけようもないほど強固な、平家の勢力を目の前にして、今日の命も保証し難い彼の毎日は、ただひたすらに、我が身の安全を祈りしかなかったと思われる。

ところで、問題は流謫当初の頼朝の心底に、果たして「平家追討」「源氏再興」の意志が、あつ

たか否かということである。

ある人は、彼が終始「有髪」を守り、決して「出家」しなかったことから、その志の強固さを説いている。しかし、他の人は、人間として耐え難かった彼の逆境を根拠として、その志のなかったことを指摘している。

この何れが正鵠を得ているかは、容易に決し得るものではない。事実、治承4年4月、以仁王の令旨を受けた前後、あるいは、同年7月24日、累代の家臣に拳兵の檄を発する前の彼の行動には明らかに、起つべきか、起たざるべきかの血の出る様な苦しみが見える。

文覚・覚淵・北条時政らの強い勸にも決せず。6月18日、京から三好康信の発した、「清盛に全国潜在源氏の徹底的な追討の意の強いこと。即座に難を奥州に避けるべきこと。」の急使を受けて、追い詰められた様な状態で意を決している。この辺では、当初から旗上げの意志が強かったとは、容易に信じ難い。

一方、この20年間に頼朝が、武力面で旗上げの準備をしていたと思えることは、表面には見えない。しかし、彼が伊豆山権現との関係に、常に留意していたこと。また、伊豆の屈指の武家である狩野氏と接触していたことなどは、考え方に依れば大きな武力に通ずる。ことに伊豆山は、当時としては伊豆最強の兵力を養っていたし、その位置が伊豆と相模の交通・運輸の要地で、軍事的価値は大きかったのである。

また、彼が名馬「池月」を丹那で手に入れた話や、三島の坂へ馬選びに行った話も、武士の真髄を失っていない例ともいえる。

ところで、前に述べた三島地域の頼朝の事跡と伝承は、そのほとんどが信仰に関するものばかりである。これは、三島が古くから、伊豆の代表的な聖地で、大社を始め多くの寺社があり、頼朝の信仰のよい対象であった、という地域性に依ることもあろう。しかし、実際は頼朝自身の信仰心に依ることが大きかったものと思われる。

どうも、三島に残る強い彼の信仰は、平家追討源氏再興の旗上げのため、と簡単に片づけられる性質のものではなさそうである。

元来、頼朝は信仰深い生まれつきであったらしい。しかも、幼時からその厚い躰を受けている。つまり彼の母は、熱田神宮大宮司、藤原季範の娘なのである。

次に、彼のあの病的な疑い深さを問題にしたい。後年、彼が弟や親族を死に追いやった事実は、まさに彼の猜疑心に依るものであった。そして、この常識を越えた疑い深さ・ねたみ強さは、何れも生来のものであったといわれている。

それに、平治の乱で、父の義朝が源氏累代の家人・長田忠致に謀殺されたこと。さらに、石橋山の戦で、自分の乳母の子須藤（首藤とも書く）経俊に、正面切って弓を引かれた体験が、いよいよ彼の疑い深さを強める結果となったものであろう。

つまり、人の心の頼み難さを、骨身に徹して知らされた彼には、親子兄弟でも絶対に信ずることが出来なくなったものと思われる。その反動が、神仏への信仰を更に強くしたものではなからうか。

話はあるが、頼朝は平治の乱以来、幾度となく命の瀬戸際に追い込まれている。しかし、その最後には、必ず九死に一生を得て、ついに天下を取った好運な男でもある。

この、自己の好運に感謝してか、彼は人にも神仏にも必ず報恩している。

三島では、もっとも信仰の深かった三嶋大社に神領・神馬などを奉獻している。ことに、文治3年（1187）辺りから、社殿の修造・境内整備の大工事を、北条時政に命じて行なわせている。

しかも、箱根、伊豆山西権現と共に巡拝する、いわゆる「三社参り」を、鎌倉将軍の公式行事化したのも彼である。

また頼朝は、鎌倉定住の後、大社の神事に出席出来難くなったことを残念がり、その都度重臣を代参させていることが、東鑑にも見えている。なお、地下の安久には、代参者として7人の百姓を選んだという。「七人頼朝」の話も残っている。

このように見てくると、頼朝の「三嶋参り」は単なる武運長久や、我が身の安全祈願といった、手段的なものではなく、むしろ純粋な崇敬心に、依る。信仰のための祈願が主体ではなかったろうか。

都に育ち、終生京文化に強いあこがれを持っていたと思える頼朝は、祇園・賀茂川・愛宕など京都風の地名を持ち、三島曆に代表される文化水準の高い三島に、強く故郷を感じたのではなからうか。そして、多くの社寺を懐にした。水と森の町三島が、たまたま好きだったのでは、なからうか。

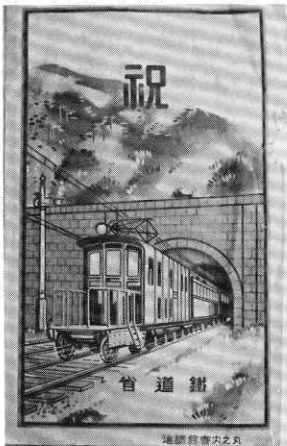
昭和53年度の新収蔵品の紹介

三島市郷土館の収蔵品は、すべて市民の皆様からの寄贈と寄託によるものです。今年もたくさんの民俗・歴史・その他の資料の寄贈を受けることができ、目下整理中です。近い将来には全収蔵品の目録を完成させて、気軽に利用していただけるようにしたいと思います。私たちの今念願している事は、もっと広いスペースの収蔵庫を造り、計画性を持った収集活動を行なうことです。

今年最後の郷土館だよりでは、53年度新収蔵品の一部を紹介いたします。

寄贈資料点数

- 民俗資料 17点 (民具)
- 歴史資料 9 " (昭和初期の町史料)
- 自然科学資料 5 "
- 書籍 5 "



「丹那トンネル開通記念史料」

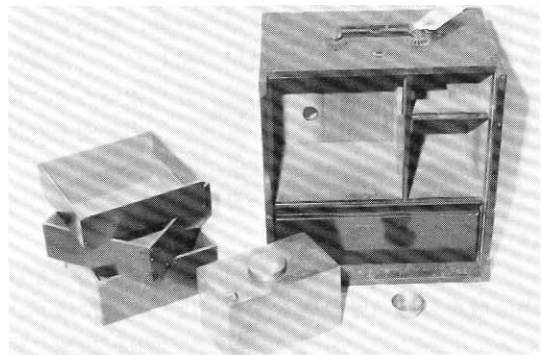
昔から東西交通の要所として栄えた三島にとって、明治22年に開通した鉄道（東海道線）が三島を通過しないものであったことは痛手であった。三島駅とは名ばかりで、実際は今の御殿場線下土狩駅がそれであり、町民にとって不便であった。しかし距離的にも遠く、時間を多く要するこの足柄越東海道線を、熱海口からトンネルを掘って函

南、三島に通じさせる新線に代える計画は早くからあった。この計画の測量が始められたのは明治44年である。工事に着手したのは大正7年で、16年の年月と延300万人の労働力、2600万円の巨費を投じて完成したのは昭和9年のことである。丹那トンネルの完成である。

同年12月1日には、三島全町をあげて盛大な開通式が催されている。史料はこの時の町民の喜びを語ってくれる。

(山川恵次氏 三島市東本町1-15-1)

S53. 8. 26寄贈)



「弁当箱」

春の花見や秋の紅葉狩りなど物見、遊山用に使われたものである。多勢の人が食事を一緒にするような場合、その人数に応じて分配しやすいように工夫されている。携帯用の箱の中には酒器、大小の重箱、はし等がきちんと納められている。

(室伏 孝氏 三島市光ヶ丘12-3)

S53. 7. 17寄贈)

報告 郷土館収蔵品展

1月15日～3月31日の会期で「郷土館収蔵品展」を開催しました。今まで常設展示で展示できなかった収蔵品を多く公開することができました。展示内容を以下に報告します。

- 1 衣類 (女性の着物)
- 2 " (ノラギ)
- 3 " (職人の仕事着)
- 4 歴史 (箱根山接待所資料)
- 5 " (新収集品から・丹那トンネル史料)
- 6 芸術 (野口三四郎の「朝鮮風景」水彩)
- 7 " (栗原忠二の「月島風景」油彩)

行事報告

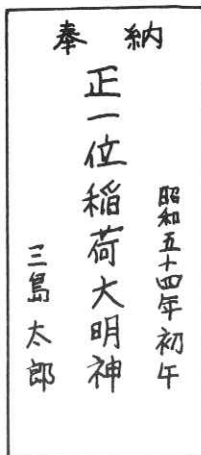
～体験講座「初午幟作り」の報告～

〔子供たちに、自分の手で物を作る楽しさ、また、昔から伝わる四季おりおりの、年中行事などを、学んでもらおう。〕という意図で、行なわれました。事前に、市内の各小学校長に依頼し、生徒（6年生）約30名程を選定してもらいました。

1月28日(日)の当日は、24名の参加者で、赤、紫緑、黄色の順に、4枚の紙を貼ることからはじまり、その上に筆で、図(1)と書き、旗を作り、竹を小刃で切ったり、穴をあけたりして幟を作った。学習時間2時間程で、早くできた子は、遅い子を手伝ったりするなど、和気あいあいのうちに終了した。(小杉)



写真①・②は、昭和54年2月初午(8日)市内多呂 288番地 原 準一氏宅にて写す。



図(1)

〔初午 はつうま〕

2月のはじめのうま(午)の日。多くは稲荷(イナリ)神社を祀る行事となっている。稲荷を屋敷神として祀る例は、静岡県では中部以東に多いようで、従って初午の稲荷祭もそうした地域に顕著である。駿東郡では稲荷さんの祠を祀る家では、正月の飾り物を一部残しておいて、この日の夕方たき上げる風習がある。熱海では稲荷を百姓の神様と言い、富士宮でもキツネは田の神の使いだと言って、いずれも農神としての稲荷の信仰を伝えており、時季的にもこの祭りが、春の農事に先駆けて豊年を祈るものであったことを、うかがわせている。稲荷信仰とは関連なく、この日団子など特別な食物を作る地方もある。特に西部の磐田郡から浜松地方にかけ、マユ団子を作って神棚に供える所がかつては多くあり浜松市積志では、蚕の祈願の対象である“コダマサマ”に蛤を供えて、繭の豊穰を祈っていたという。同様の風は、長野県に広い。一方伊豆の一带では、この日の厄落としの風も盛んで、賀茂郡南伊豆町仲木では、赤飯を棧俵に載せ、銭を紙に包んでお宮に参る途中、これを落とし、子どもらが拾って分け合う風があった。また、周智郡森町周辺には、馬を飾りつけて寺に行き、お堂のまわりをぐるぐる乗りまわしてから祈禱をうける風習があった。浜名郡の周辺では、一歳から二歳の子どもを連れて、馬頭観音へ参詣する風もある。

静岡大百科事典

日本の民俗「静岡」より記す。

ふるさとのしおり みしま

②秋葉神社

火の神の中央神の神格として、京都の愛宕神社静岡県周智郡の秋葉神社がある。各地の村社あるいは末社に勧請神として祀られている。さらに各民家で愛宕または秋葉の御札を神棚に納めたり、戸口に貼って火伏の神として信仰する風も広い。愛宕神社の祭神は火産靈神といわれ、秋葉神社は火之迦具土神を祀るといわれている。

加屋町の秋葉神社の由来については有力二説がある。一つは「三島市誌」で、寛政五年(1793)11月に鎮斎され、祭神は火産靈神とするものである。鎮斎年代について境内の一番古い施設物である「常夜燈」にその刻印が見えるので、それからの類推であろう。しかし災害記録その他からこの説には疑問が残る。祭神についても末社としての性格からして妥当とは思われない。

もう一つは林昌彦氏の説である。「御祭神、火之迦具土神。按ズルニ三島ノ發生ハ古ク且ツ徳川時代ニハ宿場トシテ殷賑ヲ極メタリ。然レドモ慶

安元年ヨリ宝暦二年ニ至ル前後八回ニ及ブ大火ノ為当駅悉皆潰滅ニ瀕シタリ。之レ孰レモ冬季ノ強烈ナル西風ニ煽ラレシノ惨事ニシテ宿民深ク之ヲ憂フ。依ッテ宝暦三年宿ノ西端タル此ノ地ニ秋葉神社ノ建立ヲ発願シ御祭神トシテ火之迦具土神ヲ勧請セリ。尔来安全息災靈験極メテ灼カニシテ宿民拳ゲテ防火ノ守護神トシテ奉斎ノ誠ヲ捧グ。古来火伏ノ行事アリテ盛シナリシト去ヒ伝フナリ」

林説は以上であるが、本末社の関係や災害記録あるいは鳥居に刻まれた「当駅秋葉講中」等からして、この説の方が有力と思われる。(稲木)



(秋葉神社)

★★★★ おしらせ ★★★★★

●郷土館の行事予定

- 春季テーマ展 「頼朝と郷土」
5月15日(火)～7月31日(火)
頼朝に関する古文書、伝説等の展示。
- 講座 「鎌倉時代の郷土」
6・7月の2回 (日程は未定)
鎌倉時代の郷土に関連した歴史講座。
- 文化映画教室 〈春の映画教室〉
4月1日(日)、3日(火)、5日(木)、6日(金)、7日(土)、8日(日)、
休み中の子供たちを対象にした映画会。
※申込、問い合わせは郷土館まで

●入館者数

| | 学 生 | 一般(個人) | 一般(団体) | 合 計 |
|-----|-------|--------|----------|-------|
| 11月 | 3,865 | 4,952 | (7)4 9 2 | 9,309 |
| 12月 | 671 | 1,059 | | 1,730 |
| 1月 | 2,464 | 3,785 | (3)1 3 1 | 6,380 |
| 2月 | 2,425 | 3,557 | (3)2 4 3 | 6,225 |

■あとながき■

いつのまにか、草花の芽ぶきははじめ……

“もうすぐ春ですネ

だれか、さそってみませんか?

郷土館に来ませんか?!.. 小杉

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.3

昭和54年4月1日発行
(年3回発行)

編集・発行 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228